

コロンビア

岩井 純

I. はじめに

コロンビアを訪れたのは2008年5月中旬のことで、コロンビアに出発する少し前（2008年5月2日深夜から3日午前にかけて）にはミャンマーでサイクロン〈ナルギス〉の被害（ミャンマー国営テレビによると死者7万7738人・行方不明者5万5917人〈5月16日現在〉）があり、また直前には中国で地震の被害（〈四川大地震（2008年5月12日発生）〉中国政府によると死者4万1353人・行方不明者約3万3000人〈5月21日現在〉）があった。

ロサンゼルスから空路AV-0049でコロンビアのボゴタ（エルドラド国際空港）へ向かった。7時間のフライトである。コロンビアの航空会社であるAV（アビアンカ航空）は現存する航空会社としてはKLMオランダ航空に次いで世界で2番目に古い。今から90年ほど前、1919年に設立された航空会社であり、南北アメリカ大陸では最初に設立された。

本報告をするにあたっては、ガイドのペドロ（カルタヘナ）・ファビオ（ボゴタ）それに通訳してくれた石山の諸氏に負うところが大きい。

II. 概 観

エクアドル・ペルー・ブラジル・ベネズエラ・パナマと国境を接しているコロンビアの国土は日本の約3倍（113.9万km²）あり、南アメリカではコロンビアだけがカリブ海と太平洋に面している。この国は32の県と首都地域ボゴタの33行政区画に分かれており、地域主義的で他地域との関係は良好とはいえないらしい。

コロンビアは赤道に近く、四季がない。この国は高度によって気候が異なり、気候に応じて多様な果物や野菜が栽培されている。高度が0～1000mの地域は暑いティエラ・カリエンテであり、1000～2000mは温かなティエラ・テンプラダである。2000～3000mは冷涼なティエラ・フリアで、3000～4000mはパラモといわれる木の生えない草原地帯となっている。4000m以上になると常に雪のあるアンデスの寒冷地域である。人口のほぼ80%が気温20度ぐらいの山岳部に住んでいる。約20%が沿岸部に居住し、ほとんど人が住んでいない未開の密林もあるという。

コロンビアの通貨単位はコロンビア・ペソで、1ドルが1600ペソ（2008年5月現在）にあたる。スーパーでは水1ℓが3000ペソ。この国の輸出品として重要なのはコーヒーであり、バナナ・切花も注目しなければならない。コロンビアはカーネーションの生産が多い。コーヒーや花のプランテーションがある。カリブ海では石油や天然ガスを採掘している。原油を輸出し、ガソリンをベネズエラから輸入している。エメラルドが存在することにも触れておきたい。輸入については日本車の場合、ホンダやトヨタに人気がある。この国の平均月収は2万5千円程度といわれるが30万円ほどの給料を得ている人もあり、貧富の差が激しい。この

国は親米路線をとっており、輸出入ともに最大の相手国はアメリカである。

この国の人は朝食をあまり食べないという。コーヒーとお菓子程度ですませるらしい。

南米では一般的にホテルの配水システムが良好ではないと言われる。給湯タンクが小さいので湯の出方がわるくなるのだ。ホテルにチェックインするときは住所氏名の記入だけではなく、パスポートを要する。セイフティーボックスを使用する場合、保証金（50～100ドル）を必要とし、鍵を紛失すると70ドルを請求される。ミニバーを使用した場合は自己申告制による支払いとなる。なお、計算を苦手とする人が多い。

コロンビアの人々の多くは混血で、スペイン人やインディヘナやアフリカ人の血が混ざっている。ボゴタはインディヘナが比較的多く、この国第2の都市メデジンはスペイン人が多い。コロンビア人は多様であり、様々な人種・民族がいる。この国の95%の人がカトリックだという。ちなみに、コロンビアの三大都市はボゴタ、メデリン（アンティオキア県）、カリ（バジェ・デル・カウカ県）である。

この地はいくつもの部族に分かれてインディヘナが住んでいた。そのなかで大きな勢力を持っていたのがチブチャ族である。しかし、16世紀にはこの地はスペインの植民地となる。その後、1819年にグラン・コロンビア共和国（ベネズエラ・エクアドル・パナマを含む）となった。パナマもコロンビアであった。しかし、1830年にはベネズエラ、エクアドルが分離独立し、1903年にはパナマも独立した。パナマを独立させなければコロンビアは南米でもっとも裕福な国であったかもしれない。

国境地帯では反政府武装組織のFARC（コロンビア革命軍）が支配している地域がある。国境地帯だけではなく、国内の山間部においてもFARCの支配地域があるらしい。国境地帯が危険地域となっているが、ボゴタ周辺の、都市域ではない地方にもFARCの影響のあるところがあるらしい。FARCは誘拐をして山岳部に拘束し、身代金をとるなどのことをする。ベネズエラやエクアドルはFARCを支援しているという声も聞かれるが、その信憑性について筆者は判断する材料を有していない。FARCは「マルランダを最高指導者として仰ぎ、九〇年代以降ラテンアメリカ最大のゲリラ組織として、コロンビアの政府権力と対峙してきた。・・・理想は、伝統的な〈システム（寡頭支配体制＝二大政党支配体制）〉に代わる人民民主主義の〈ヌエボ・システム（新体制）〉を確立すること。・・・九〇年代までの戦略は、兵力を三万人以上に拡大させ、農村部を主戦場として、国軍と正面戦争をすることだった。・・・都市人口の六五％（全人口の五二％）と、農村人口の七〇％（同一四％）は貧困層（同六六％）であり、FARCは、この〈潜在的支持基盤〉の開拓を戦略に組み込んでいる。戦術は、正面の敵である治安部隊（軍・警察）、および側面の敵であるAUCとの農村部での戦闘、都市部での治安部隊施設に対する爆弾テロ、社会基礎構造破壊のほか、身代金目当ての拉致・誘拐、〈革命税〉奪取、麻薬生産地での〈安全保障料〉徴収など。〈革命税〉とは、企業や有産層に対する〈共存保障料〉のようなもの⁽¹⁾である。左翼ゲリラにはELN（民族解放軍）もあり、「戦術は、FARCと似ているが、際立つのは、送油管爆破作戦⁽²⁾」である。一方、パラミタレス（準軍事集団）と呼ばれる右派武装集団にAUC（コロンビア統一自衛軍）がある。「AUCは、麻薬マフィアと連携し、治安部隊から非公式な庇護を受けつつ、FARC、ELNを主要な敵として激しい殺戮⁽³⁾」をしている。なお、誘拐による身代金に関してコロンビアの「法律では、ゲリラに身代金を払うことは、幫助の罪に当たるので厳罰に処す⁽⁴⁾」ことになっているという。

現大統領アルバロ・ウリベ・ベレスの支持率は高い。かれのテロに対する強硬政策が一定の成果を挙げ、治安が改善されたとの評価がなされているからである。ウリベの前の大統領アンドレス・パストラナは内戦を終結させるため対話による政治的解決をすべく、FARC との和平交渉を行なった。コロンビア南部に緊張緩和地域を設定し、国軍と警察部隊を撤退させることによってゲリラの実効支配を認め和平の足がかりとするものであったが、成功しなかったのである。

コロンビアの教育制度は、ガイドによると小学校は5年間で義務教育（無料）であるが、ハイスクールは6年間で義務ではなく、大学は5～7年間で無料ではない、という。これに対し、5年間の初等教育及び4年間の前期中等教育は義務教育（無償）で、2年間の後期中等教育は任意とする紹介文がある。また、別の紹介文は就学前教育（3～5歳）・初等教育（基礎初等6～10歳・基礎第2次11～14歳）・中等教育（15～16歳）・高等教育（大学・大学院等）から成り、5歳時から初等教育までが義務教育、としている。どうやら制度上は9年間で義務教育とされているが、必ずしも完全に就学がなされているわけではない、と考えるべきであろう。

日本人がコロンビアやベネズエラに旅行する場合、「観光目的で90日以内なら査証不要」である。これはコロンビア人やベネズエラ人が来日する場合も全く同じ条件でビザ（査証）が不要であることを意味する。もちろん、就労する目的であれば別である。日本とコロンビアとの間では査証相互免除取極が結ばれているが、ベネズエラとの間ではそのような協定は結ばれていない。外務省によれば、査免協定が結ばれていなくても、相手国が査証不要の扱いをする場合はこちらと同じ扱いをし、査証要の扱いをする国には日本も相手国に査証要の扱いをしているという。ガイドによると、コロンビアに入国するのにビザを必要としている国はメキシコ・ブラジル・クロアチア・中近東及びアフリカ諸国だという。

Ⅲ. カルタヘナ

カルタヘナの正式名称はカルタヘナ・デ・インディアス。カルタヘナはこの国第五の都市で人口は100万人、ボリバル県の県都である。美人が多い。5月であるが気温が28度、湿度は95%あるという。コロンビア北部に位置し、カリブ海に面した港湾都市でクルーズ船が寄港する。クルーズ客船クイーン・エリザベス2号の乗客の日本人が上陸したこともある。「カルタヘナの港、要塞と建造物群」が世界遺産に登録されている。ここは奴隷貿易の中心地であったこともあり、黒人の多いところとなっている。なお、この町はスペインのセビリヤとアメリカのコーラルゲーブルズ（フロリダ州）と姉妹都市である。

カルタヘナは7kmの城壁で囲まれている旧市街とカリブ海へ突き出た新市街から成る。城壁は17世紀にできたものの、拡張が終了したのは18世紀のことであった。11kmあった城壁はところどころが損傷し、4kmは建物を建てるために破却したため7kmの城壁となっている。城壁には石灰岩が用いられている。ボカグランデ地区は新市街であり、ホテルのほとんどは新市街にある。筆者の宿泊した「アルミランテ」は「資質の高い」という意味である。「ALMIRANTE ESTELAR」の名称にあるように現在ではコロンビア資本の「ESTELAR」グループ系列のホテルとなっている。この地でのコンドミニウムの1部屋の購入価格は3150万円以上だという。城壁を構築したのは海賊から町を守るためであり、イギリスやフランスの侵

攻を防ぐためである。この町は金・銀・エメラルド等の集積・保管の地であり、それらのスペインへの積出港であった。スペイン支配時代には五つの要塞が造られ、なかでもサンフェリペ要塞は最も大きかった。

カルタヘナ湾の海中に聖人の像がある。航海を見守る聖母マリア（守護聖女）の像である。湾内には海軍学校に属する3隻の船が停泊している。香港船が入港しているのは衣類その他の生活用品を輸入しているからである。

スペイン統治時代よりも前、現在の旧市街にあたる場所は左側の島（カラマリ島）と右側の島（ヘツセマニ島）に分れていた。今道路になっているところが二つの島に分ける水辺だったのである。植民地時代、カラマリは富裕層と軍人の居住地となっていた。17～18世紀の建物が残っている。カルタヘナ市が建設されたのは1533年のことで、コロンビアで2番目に古い町だという。カラマリ島とヘツセマニ島の二つが7kmの城壁に囲まれていた。ロマン橋を渡るとマンゴ島（マンガ地区）で、その左にサンフェリペ要塞がある。マンゴ島（あるいはマンガ島）は元々はマンゴーが植えられていたところで、今は富裕層の居住地となっている。この地区は戸建の家であることが特色で、ホテルの多いボカグランデに住む富裕層が高層マンションに居住するのとは比べられる。なかでも立派な家はこの地におけるコカ・コーラの社長のものである。ペプシ・コーラの社長の家もある。庭師を雇って庭に工夫を凝らしている家は富裕層のなかでもより富裕である。モンテソレー小学校や私立大学がある。マンガ島のメインストリートであるカリリアルデマンガを通過してサンフェリペ要塞に向かう。

サンフェリペ要塞下の広場にはドン・プラス（プラス・ド・レゾ提督）〈スペイン人〉の像がある。かれは6000人の軍勢（内スペイン人は2000人）で、2万5千人のイギリス軍のカルタヘナ攻撃（1740年）に勝利した。ドン・プラスはこの戦い以前に片目（左目）・片手（右腕）・片足（左足）を失っていた。この像の台座に嵌め込まれたメダルはイギリス人がスペイン人に剣を渡している図柄である。軍勢で勝るイギリスは戦いの前に勝利を確信しており、大量にメダルを作ったのであるが、敗北を喫したためメダルを海中に投棄したという。カルタヘナ湾の中にある港に侵攻してきた敵は直接旧市街を攻撃することなく、いったんラポパ（岩山）に来て全体を見渡してから徒歩で旧市街に向かって来る。だからサンフェリペ要塞はラポパから来る敵を迎え撃つ位置に構築されている。元来は小さな丘であったところに、大きな石がなかったため火山岩・貝殻石・レンガ等なんでも使って要塞を造った。砂・シロップ・鳥の糞を混ぜることによってセメントの代わりにしたといい、ガイドによるとそれはセメントよりも強力だという。要塞にある道は元来レンガでできていたというが、今はコンクリートで覆っている。火薬庫がある。火薬はここで製造もし、保管もしたという。昔は木の跳ね橋であったところが今はレンガ造りの橋になっている。要塞を守る兵士は交替制で、時間になると旧市街に帰り、要塞を守っていたグループとは別のグループが要塞に来た。ただし、司令官だけは要塞に居住していた。雨水をためていた井戸がある。川が遠いので、当時は雨水を飲料水として用いていたのである。要塞の地下には多数のトンネルが複雑に入り組んで存在している。深いところにある地下トンネルでは窒息のおそれがあるので、通気孔が設置されている。見方を変えれば、通気孔が設置されているところは地下の深いところにトンネルが存在していることがわかる。たくさんの地下トンネルは緊急避難経路でもある。大砲の多くはラポパに向かって設置されていた。ガイドによると、大砲は多少修復してあるものの17世紀のオリジナルだという。銃眼もある。壁の向こう側は狭く、こちら側は広く造ってあるのは銃眼の常である。トン

ネルを通過して要塞の上に出る場合、今は明かりがついているが、要塞としての機能を果たしていた当時は暗い中を歩かねばならなかった。それゆえ、敵味方を見分ける合言葉があったという。スペイン人はイギリス人よりも背が低かったが、トンネルの高さはスペイン人のサイズに合わせて造ってある。トンネルをコンクリートで修復したところにレンガが見えている。トンネルは元々はレンガで構築されていた。下からは上の方がよく見えないが、上からは下がよく見えるという構造に造ったトンネルがある。要塞は17世紀から100年以上かけて造られ、18世紀に造られたところもある。坂を奴隷を使って物を運び上げるときに用いる、ロープを巻きつける柱状の物が設置されている。ところどころ要塞に小さな穴をあけてあるのは、熱で膨張して石が割れるのを防ぐためである。1950年に新しく造られたという階段がある。要塞からはボカグランデ地区が見える。

140 m の岩山の上に建っているのは古い修道院である。ポパ修道院（アウグスティン修道会）では現在2人の修道士が2階に暮らしている。2階の他の部屋は修道院を営繕するために雇用している人が使っている。しかし、今は修道院としての機能はしておらず、修道士は建物の管理をしているだけである。建物の維持費として入場料を取っている。修道院の内部に、身体の特定の部分を表示した小さな金属片を貼り付けたところがある。これはその部位の病気が治癒した後、感謝の意味で奉納したのである。2人の子ども（双生児）を示す金属片は、子宝に恵まれなかった人が子ども（しかも双生児）を授かったお礼である。昔、雨水を溜めて飲料水としていた井戸は屋根からの水を集水できるように床に傾斜をつけている。この井戸（貯水施設）は12万5000ℓ貯水できるという。丘の斜面に住んでいる人は治安のよくない地方から避難してきた人たちである。ここに家を建てるのは、雨が降ると土砂崩れがあり危険である。しかし、貧困のためここにしか住めないのである。丘に上る道路に沿っていくつかの十字架がある。毎年聖アウグスティンの日に修道院に向かうカトリックの信者が十字架に祈りを捧げながら行くのである。その日はカトリックの信者が神輿を担いで歩いて下りる。疲れたら別の人に交代しながら担いでいく。1822年からかなりの長期間、だれもこの修道院には住んでいなかった。1821年、シモン・ボリーバルのスペイン人征服者の国外追放によりカルタヘナも独立（1810年11月11日カルタヘナ参事会は「カルタヘナ共和国」の独立を宣言）をし、カルタヘナの政府機関が力のあるスペインの宗教団体に属する修道士を追放したからである。多くのタクシーが走っているカルタヘナのメインロードが見える。敵はこのメインロードを歩いて旧市街に向かったのである。丘の上から見える貧民街は道路が舗装されていないことから他と区別されている。雨季に満潮になると、水害を受けることもある条件の悪いところに位置している。就労していない人もいて、そのような人は健康保険に入ることもできず、病気になっても医者にかかることができない。公共の医療機関もあるが、それでも経済的に医療サービスを受けられないらしい。なお、カルタヘナの空港も雨季には水浸しになることがあるという。闘牛場や化学工場が見える。カルタヘナの場合、闘牛は1月に行なうが、年によっては違うこともある。煙突の立っているところは工場地域となっている。ポパ修道院ができる前は、石を運ぶなどの重労働をさせられていた奴隷の住む場所であった。今は車で1時間ほどのところに純粋なアフリカ人の「アフリカン・ビレッジ」があるという。

旧市街にはサンペドロ広場（12使徒の1人ペドロにちなむ）、クーポラ（ドーム）の美しいサンペドロ寺院（ペドロ大聖堂）、黄金博物館（先住民の文化に関する博物館で、最大の黄金博物館はボゴタにある）、宗教裁判所跡、クラフトマーケットや修道院等がある。コンベンシ

オンセンターであったところが五つ星のホテルになっている。コロニアル・スタイル（植民地時代からの様式）の建物で、フロントには「小鳥たちの楽園」という意味のコロンビアの花が飾ってある。30年前まではカルタヘナの一般市民が住んでいた一画は、世界遺産に登録されて諸費用が高騰したため住めなくなり、富裕層に売却され今は富裕層の住むところとなっている。1533年にカルタヘナができた当時は木造の家屋であったが、それらは16世紀のうちに火災で焼失した。現存しているのは17～18世紀の石造りの建物である。ほとんどの家にバルコニーがあり、バルコニーごしに話ができる。この地域はまだ修復作業が続いている。壁が厚くて、天井を高くするのがコロニアル・スタイルの特徴である。30年前の木造の家も残っており、その当時の姿に修復している。中南米の旧市街共通に見られるように、建物の色はオレンジ色あるいは黄色で、スペイン風になっている。コロンビアの国花はカトレア（ラン科）であるが、カルタヘナは暑いのでランの栽培はできない。ランは20度ぐらいのところ、メデジンで栽培されている。

ペドロ（ピーター）広場があり、それに面してサンペドロ寺院（ペドロ大聖堂）がある。このカテドラルは1610年に建てられた。大聖堂に隣接して元々は墓地があったが、そこに聖職者を養成するための神学校が建てられた。神学校ではペドロ・クラベル（1580. 6. 26～1654. 9. 8）が指導にあたった。ペドロ・クラベルはアフリカ人奴隷貿易の実情をみて、奴隷の人権を擁護したといわれている。クラベルは建物の上の階に住んでいた。かれは奴隷船が入港すると、かれらの精神的苦痛を和らげるために声をかけていたという。神学校のなかで、ミュージアムになっている区域にはカトリックの聖人像が設置されている。ローマ法王（ピオ11世）の像もある。建物は17世紀に造られた3階建てで、オリジナルの天井の梁は木でできている。17世紀には上水道の施設がなく、雨水を貯めて使用していた（貯水施設がある）。神学校の敷地にはマンゴーの木や椰子の木がある。木が育ちやすい気候なのである。「小鳥たちの楽園」という名の植物と同じ種類の植物と思われるジンジャーがある。ジンジャーエールはジンジャーのエキスをういてつくった清涼飲料水である。ここで飼育しているオームの羽根の色は黄・青・赤であった。ペドロ大聖堂の中にはイタリア各地からもってきた石でつくったペドロ（ピーター）の像がある。その像の下にペドロ・クラベルの遺骨が安置されている。この遺骨は死後300年を経てここに納められたという。この大聖堂のクーボラ（ドーム）はバチカンのサンピエトロ大聖堂の円蓋（ドーム）を模したものである。大聖堂のバルコニーのある部屋は、18世紀に庶民と一緒に礼拝を嫌った上流階級のためのものであり、サービスは別々になされた。教会の床の下は墓地になっている。カトリックは火葬ではない。死後3年を経て家族が遺骨を取り出し、床下とは別の場所に移したという。富裕層は教会に多額の寄付金を提供している。多額の寄付をしなければ教会に埋葬されることはなかった。貧しい人たちは埋葬施設を別のところにつくったのである。この大聖堂では毎夕5時になるとミサが行われる。ここにある懺悔室の場合、聖職者に懺悔を聞いてもらうためには予約が必要だという。

広場に面しては近代博物館もある。広場にはカルタヘナの芸術家の作品が置かれている。「果物売り」、「散髪屋」など植民地当時の職業や当時行なわれていた遊び「チェス（ドミノというべきか）をする人」等すべてカルタヘナの芸術家の作品である。

コロンプス広場（プラサ・デ・コロン）に面した市庁舎は修復中である。コロン（スペイン語）はコロンプスのことであり、ここにはコロンプスの像がある。

時計塔の門があり、その手前の広場にはペドロ・デ・エレディアの像がある。スペイン人ペ

ドロ・デ・エレディアは16世紀にこの地に上陸しカラマリ族（カリブ語を話すインディヘナの一族）を倒してカルタヘナ市を建てた。広場を出たところにストリート・マーケットがあり、野菜などを売っている。16世紀に造られたオールド・カテドラルがある。クーポラは19世紀に造られたもので新しいが、それ以外は16世紀のものだという。このあたりは17世紀にはほとんど建物がなかったらしいが、今もオールド・カテドラルで毎日サービスが行なわれている。

ボリバル広場がある。市民の憩いの場である。広場の名前につけられたシモン・ボリバル（1783. 7. 24～1830. 12. 17、ベネズエラのカラカスに生まれた）はラテンアメリカのスペインからの独立・解放のために闘った人物である。ボリバル広場に隣接して黄金博物館や宗教裁判所跡がある。カルタヘナの黄金博物館もボゴタの黄金博物館も先住民族の残した文化を展示しているが、ボゴタの博物館がコロンビア全体の先住民族のものを展示しているのに対し、カルタヘナの博物館はコロンビア北部のこの地方のものを展示している。プレ・コロンビア文化（スペイン人による征服前の文化）があり、そのなかにシヌー民族の文化もある。シヌー文化はコロンビア北部、シヌー川下流を中心に500年頃から800年頃に栄えた。南北アメリカ大陸の先住民族は、氷河期末期アジアからベーリング海峡を渡って移住分散し、コロンビアにも到達したと推定されている。シヌー族は3つの集団に分かれていたと考えられている。狩猟・漁労・農耕に従事するグループ、川から砂金（金が50%・銅が50%の割合に混ざったもの）を取るグループ、聖職者（土着宗教の）グループ、である。金は力の象徴であり、身体はゴールドの装飾品で飾られていた。人が死ぬと、その人の所有する価値ある物は一緒に埋められた。死後の世界に大切な物を持っていくのである。だから侵攻してきたスペイン人は墓を掘り返したのである。ここには首長の所有していた剣の飾りも展示されている。パナマに近い地域にはチョコ族の文化があり、チョコの遺跡がある。チョコという名前はコロンビア北西部のチョコ地方に由来する。ちなみに、チョコ県の県都はキブドである。タイワノ族の文化の手がかりも残っている。なお、コロンビア南部ウイラ県（県都はネイバ）にあるサンアグスチンは金の取れないところであったから石の文化がみられ、人の形をした石像が残されているという。

宗教裁判所跡。スペイン支配時代はこの居住者はカトリックでないといけないとされていた。しかし、カルタヘナは南米の富の集まる場所であり保管される場所であったから、異教徒も集まってきたのである。ここでは異教徒の摘発と処罰を目的とする宗教裁判が行われ、カトリックではない人をここで絞首刑にしたり首を切ったりした。ここに展示されている処刑や拷問のための道具はオリジナルではない。拷問の道具にはたくさんの種類があり、手足をロープで引っ張る拷問道具もある。拷問されている人物の像もある。アフリカ人や先住民の宗教、それらが融合した宗教をスペイン人は理解できなかったのであろう。

IV. ボゴタ

ボゴタの空港では麻薬検査が、去年からより厳しくなったという。ボゴタは高原都市であり、涼しい。朝の気温は12度（夜間7～8度に下がることもある）ほどで、日中でも15度ほどである。高山病にはならないが、アルコールの回りは速くなる。ガイドによるとボゴタはカリブ海から1000 km、太平洋から800 km内陸に入ったところにあるという（地図で見る

と、カリブ海にも太平洋にももう少し近いように見えるのであるが・・・)。ボゴタは「コロンビアの首都であり、クンディナマルカ県の県都。・・・アンデス山系中のクンディナマルカ盆地の標高 2600 m の高地部に立地する。1538 年ヒメネス・デ・ケサダが先住民チブチャ族の地に創設し、植民地時代はサンタ・フェ、またサンタ・フェ・デ・ボゴタと称した。ボゴタの名は原住民チブチャ族系のバカダ族に由来」⁽⁵⁾している。現在の名称は「ボゴタ」(旧に復した)であるが、1991～2000 年までの名称は「サンタ・フェ・デ・ボゴタ」であった。「サンタ・フェとは、カトリック暦の祭日名で、『聖なる信仰 (キリスト教) の日』であり、この日に都市が開礎されたことを意味する。ボゴタはこの地のインディアン酋長の名で、地名全体では『ボゴタ酋長の率いる種族の住む聖なる信仰の日の都市』の意味」⁽⁶⁾となる。筆者が宿泊したのはボゴタの東側にあつて比較的治安の良い高級地区にある、ホテル・モリソンである。治安の良いところであっても夜は危険だという。ホテルから徒歩 5 分のところにあるスーパーは夜 9 時過ぎには閉店していたが、ホテルのすぐ近くには 24 時間営業のスーパーがある。多くの商店では US ドルで受け取るが、スーパーでは US ドルは使えない。東側は山側 (アンデス山脈) で富裕層の住む地区であり、ここにあるブティックは富裕層をターゲットにしている。西側は昔風の建物と新しい建物が相半ばしている地域である。ボゴタの人口は 700 万、カルタヘナの 7 倍である。ボゴタはよく渋滞する。信号で止まった車をターゲットとする物売りがいる。経済的に苦しい国民は少くないようだ。「199、150、ミヌート」と表示した商店は携帯電話を貸す商売を行なっている。常時電話を利用しない者にとってプリペイド・カードは高価なので、1 分間 200 ペソほど (10 円か 20 円ほどか) で携帯電話を借りるのである。ボゴタ市内の渋滞を緩和する目的でナンバープレートの末尾番号による車の規制が行なわれている。この規制はピコ・イ・プラカと呼ばれ、週 2 回朝夕の通勤時 (朝 7～9 時、夕 5～8 時) 車を運転してはいけない日が設けられている。昔からある道で、南北をつなぐ主要道路のカレラ 7 は常に渋滞があるという。南北に走る通りをカレラというのに対し、東西に走る通りをカジェと称する。商業地域であるチャピネロ地区は 19 世紀後半イギリスの影響のあったところだという (今イギリス人は住んでいない)。カレラ 7 に沿って官庁街があり、北から日本大使館 (建物の 9 階にある)・有名私立大学のハベリアーナ大学・国立博物館・大統領府が並んでいる。ボゴタは大学の多い都市であるが国立大学は少なく、多くは私立大学である。ハベリアーナ大学は公園に隣接しており、学生数が多い。国立博物館は昔刑務所であった建物で、外の壁に窓が無い。1 階には国内に落下した隕石が置かれている。3 階には現代美術が展示されており、コロンビアの画家であるフェルナンド・ボテロのボテロ・ルームがある。かれは絵画だけではなくブロンズ像も制作している。ボテロは現在 76 歳であり、ヨーロッパで有名だという。かれが 45 歳のときの作品ラランハ (オレンジ) も展示されている。博物館の近くには 1931 年に造られた闘牛場がある。

旧市街 (セントロ) の中心部にボリバル広場がある。ここは独立宣言をしたところで、この広場に面して建っている「7 月 20 日博物館」から独立を宣言したという。コロンビア共和国の独立記念日は 7 月 20 日 (独立宣言は 1810 年 7 月 20 日になされた) である。「スペインは 1718 年にボゴタに副王をおき、いまのコロンビア、エクアドル、ベネズエラ、パナマをあわせたヌエバ・グラナダ副王領を統治させるが・・・1810 年 7 月 20 日、ボゴタのクリオーリョたちは副王を追放し、独立を宣言した。この後スペインとの間に独立戦争が始まるが、19 年 8 月、シモン・ボリーバルやサントデルの率いる植民地解放軍は・・・勝利を決定的な

ものとした。ヌエバ・グラナダがグラン・コロンビア共和国として正式に成立したのは21年のことである。しかしグラン・コロンビアは30年に解体、エクアドルとベネズエラはそれぞれ分離独立し、いまのコロンビアはヌエバ・グラナダ共和国として独立した。・・・1886年・・・国名も・・・現在のコロンビア共和国という名称」(7)になる。広場に面して裁判所・プリマダ大聖堂・国会議事堂・行政官庁・大統領官邸等がある。ボリバル広場から少し離れたところにイタリアン様式のカルメン教会（カトリック）がある。かつてはカルメン修道会の建物があったが、今はハイスクールになっているという。旧市内のカンデラリアの一部には石畳が残っている。カンデラリアはボゴタ発祥の地で、スペイン植民地時代の古い建物が残っている。周辺に大学があり、学生街になっている。学生街であるから、食事をする場・雑貨屋・教会それに古い劇場（テアトロ・リーブレ、直訳すると無料劇場となるが無料ではない）があって、文化・芸術の香りのする地域となっている。カンデラリア地区では、現在みられる「数字」による道路表示のほかに「名前」による表示がなされ、建物の角にスペイン時代の名前が付せられている。黄金博物館は改装中である。黄金博物館（コロンビア銀行付属）の収蔵品の一部を保管している博物館がある。ムセオ・カノは金製品やエメラルドを販売する商店が造った博物館で、店の一面に墓地に関係のあるものが展示されている。死後の世界で身分がわかるように、遺体とともに埋葬した金の装飾品がある。黄金博物館が改装中のため、黄金博物館所有の物を分散して展示・保管を行なっているという。コルパトリア・タワーはボゴタで一番高いビル（50階建て）で、商業オフィスが入っているという。ボリバル・パークにはボリバル湖があり、この国では道路・公園・湖等どこにでも独立・開放の父ボリバルの名がつけられている。4万5千人収容できるサッカー場がある。コロンビアには18のサッカー・チームがあるという。コロンビアはサッカーが強く、南米で3位にランクされるという（1位はブラジル、2位はアルゼンチン）。

3200 m の、高い丘（モンセラテ）があり、そこから市内を展望できる。ボゴタは盆地に開けた町で、左側が歴史地区・右側が新市街となっている。モンセラテは、2600～2700 m のボゴタ市街より600 m 高い。ここに登る手段としてはケーブルカー（45度の急傾斜）・ロープウェイ・徒歩の三つがある。敬虔な信者の場合は膝をつきながら登るという。健康のために走って登る人もいる。徒歩で下りると1時間半かかるという。丘の上にはモンセラテ・バシリカ教会堂と二つの高級レストランがある。モンセラテ・バシリカ教会堂は20世紀初期に、バシリカ様式で建てられた。ケーブルカー駅から寺院までの間はイエスの受難を表した道になっており、十字架を担いだ場面等が示されている。向こうに見える白いキリスト像の建っているところは高度3400 m のグアダルーペ展望台（丘）である。

ボゴタの北40 km のところにあるシパキラ（人口10万の町）には岩塩教会がある。1万人の収容ができる大きな教会（ガイドによると広さ8500 m²だという）で、バチカンのサン・ピエトロ寺院をしのぐ収容人数である。洞窟の中はひんやりとしており、入り口付近にはユーカリの木を上部・側面に設置してあってかすかに硫黄の臭いがする。トンネルの壁には塩が付着している。雨水がしみ込むと塩分が析出するらしい。塩は今掘ってはいないが、掘れば採掘は可能という。この塩は薬用に使われたというが、精選して食用にもした。ここは何億年前にはカリブ海であったといわれる。電灯が点いており、懐中電灯は必要ない。先住民のチブチャ族は昔からここで塩を採掘していた。ここにはキリストの受難の場面（14）が彫られているという。受難の十字架は岩塩でできている。十字架を背負っていくキリストを群集の中の

マリアが見ている場面もある。教会は1954年に完成した。1989～1995年に新たな設計で修復し、1995年にオープンした。元々あった古い教会から持ってきたという天使像（イタリアの彫刻家による）がある。岩塩教会には聖歌隊席があり、音響効果が良い。地下45m、山の頂上からだとは180m下のところに教会の中心部の十字架がある。この十字架は縦15m・横10mを70cmの深さに掘ったもので、通常の十字架とは異なる。鉱夫が仕事の前に毎日安全祈願の祈りをするチャペルもある。イエスがベツレヘムの馬小屋で生まれた場面の彫刻（イタリアの彫刻家による）のあるところは「誕生の身廊」と呼ばれる。「死の身廊」もある。身廊とはキリスト教聖堂内部中央の入り口から祭壇までの間をいう。滝のように見えるのはヨルダン川を象徴化してつくったものだという。岩塩教会に隣接して劇場があり、コンサートや会議の場になっている。結婚式はメインの祭壇のあるところで行なう。「岩塩教会」は身廊の入り口からを言い、そこに通じる洞窟部分は教会ではない。

V. おわりに

コロンビアといえば麻薬・誘拐・暗殺・殺戮・テロといったイメージがつかまとう。たしかに、「従来、綿花や米が栽培されていた土地が、急速に大麻畑に変わっていった。多くの小農や都会の失業者が、待遇のよさに惹かれて大麻栽培農場の労働者になった」⁽⁸⁾。またシカリオの存在もある。「シカリオとは、バイクを乗りまわす郊外出身の貧しい男たちで、大金で雇われては、殺人をおこなう者たちだ。毎日、コロンビアのどこかでシカリオによって人が殺されている」⁽⁹⁾。しかし、ほんのわずかな期間滞在した旅行者には、危険な国でありまた政治腐敗に苦しむ社会であることは実感できない。旅行者に実感できないことが、この国に住む人にとっても実感できない社会になることを願う。ちなみに、「それでも私は腐敗と闘う」の著者で、女性政治家のイングリッド・ベタンクールは2002年に大統領候補として選挙キャンペーン中にFARCに誘拐されたままになっていた。コロンビア軍が「約6年間拘束されていた元大統領候補のイングリッド・ベタンクール氏（46）を含む人質15人を、全員無事に救出した」⁽¹⁰⁾のは2008年7月2日のことである。

注

- (1) 大貫良夫・落合一泰・国本伊代・福嶋正徳・松下洋監修、ラテン・アメリカを知る事典、平凡社、1987、P.385
- (2) 伊高浩昭、コロンビア内戦ーゲリラと麻薬と殺戮とー、論創社、2003、P.63
- (3) 前掲(2)、P.60～61
- (4) 前掲(2)、P.124
- (5) 前掲(1)、P.179
- (6) 牧英夫、世界地名の語源、自由国民社、1982、P.253
- (7) 志村昭郎、私はコロンビア・ゲリラに二度誘拐された、ランダムハウス講談社、2004、P.312～313
- (8) 伊高浩昭、コロンビア内戦ーゲリラと麻薬と殺戮とー、論創社、2003、P.105
- (9) イングリッド・ベタンクール著、永田千奈訳、それでも私は腐敗と闘う、草思社、2002、P.12
- (10) 朝日新聞（夕刊）2008年7月3日